

## 第1章

大口中学校って、どんな学校ですか。

第1章では、「大口中学校って、どんな学校ですか？」という標記の問いに対して、3つの回答でお答えします。この3つの回答が、大口中学校の特色であると言えます。

1 大口中学校は、教科センター方式の学校です。

① 教科センター方式って、生徒が教室を移動する方式のことでしょ？

教科センター方式は、「生徒が教室を移動する方式」であると、しばしば言われています。でも、教科センター方式ではない、通常の中学校でも、生徒は教室を移動します。具体的には、理科の授業を受けるために理科室に移動する、技術科の授業を受けるために技術室に移動するなど、中学校 9 科目のうち、理科・音楽・美術・技術家庭・保健体育の 5 教科は、生徒がそれぞれの教室に移動して授業を受けます。なぜ移動するのかというと、その教科に適した学習環境が、その教室で整っているからです。これが、大口中学校では、残り 4 科目である、国語・数学・社会・英語においても、生徒が教室を移動します。なぜなら、移動したその教室は、国語や数学を学習するのに適した環境になっているからです。

② その教科の学習に適した教室とは？

では、「その教科に適した学習環境が整っている教室」とは、どのようなものでしょうか。例えば技術室なら木を切断する作業がしやすいように作業台のある教室、理科室なら実験に使用する薬品や器具が備わっている教室、というようなイメージは持ち得やすいと思われます。では、国語の学習をするのに適した教室とはどのようなものでしょうか。

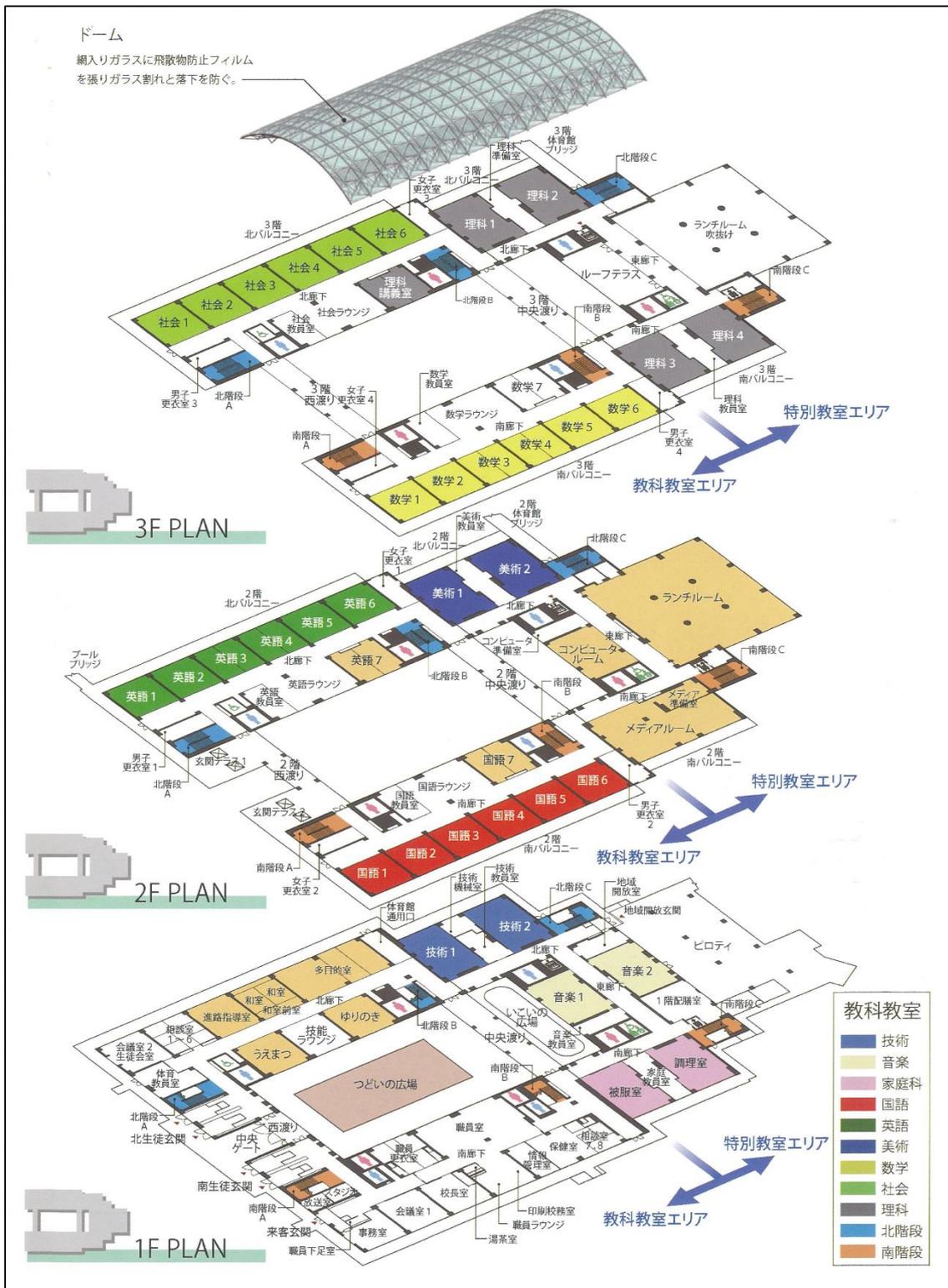
次ページは、大口中学校の教室配置図です。

国語教室がどこにあるかと探しますと、南館 2 階に「国語 1 教室」から「国語 7 教室」までが、まとまって配置されていることが分かります。このような教室配置のもと、例えば、国語 1 教室では 3 年生の生徒が「おくのほそ道」の学習を、国語 2 教室では 1 年生の生徒が「竹取物語」の学習を、同じ授業時間に学習をしています。つまり、その時間において南館 2 階の空間は、古典の世界に浸る空間として共有されています。このように教科ごとにまとめて教室配置をすることで、その教科固有の学習空間を創りだし、生徒の学びに向かう力を引き出そうとしているわけです。

③ 国語ラウンジって何？

次ページの教室配置図を見ると、国語 3 教室と国語 4 教室の前に「国語ラウンジ」というオープンスペースがあります。このオープンスペースには、国語科関連の図書・資料や生徒作品の展示がなされ、国語の授業を学びに来た生徒たちの学習意欲を喚起したり支援したりする、教材教具や掲示物が展示されています。国語の授業を学ぶために南館 2 階に移動してきた生徒たちを、国語の環境に誘う場所であると言えます。

# 大口中学校教室配置図



#### ④ 国語教員室って何？

前ページの教室配置図を見ると、国語ラウンジの横に「教科教員室」という部屋があります。この部屋は、国語科教員の執務場所となっており、国語ラウンジにいる生徒は、授業に関する質問を気軽に尋ねることができます。一般的な学校にはこのような教員室はありませんので、教員に質問するためには、職員室に行かなければなりません。大口中学校におけるその環境は、大変恵まれていると言えます。

#### ⑤ 教室の垣根を越えて

教科ごとに教室がまとまって配列されていることの利点として、教科における教員間の連携が図られるということが挙げられます。

どの中学校でも、例えば国語科教員の場合、5人程度の教員がいます。それぞれの教員は、自分が担当する学年学級の教室に出向き、授業を行うわけですが、5人の指導内容や指導方法は、ともすると教員個々の裁量に委ねられ、情報連携が十分に図られない問題点が指摘されています。しかしながら、国語教員室のある大口中学校では、日常的に国語科教員の情報交換が図られ、その結果、国語科教員がチームとして全ての学年学級の教科指導に当たるという、体制を整えることができます。

#### ⑥ 教科センター方式とは何か？

以上のことから、教科センター方式とは、単に、「生徒が教科の教室に移動する方式」ではなく、生徒に最適な学習環境を提供するために、「教科指導を中心に据えた学校運営の方式」であると定義することができます。

クラス数だけの普通教室を用意し、特別教室を組み合わせれば出来上がりというのが、従来型の中学校の計画でありました。これに対して、教科センター方式は、「生徒に最適な学習環境を与えたい」という大口町民の志によって創られたものであります。教科センター方式は、従来型の中学校では、行いたくてもできないものです。大口中学校だからこそ、実現が可能な方式であると言えます。

## 2 大口中学校は、ブロック活動が盛んな学校です。

大口中学校の特色として、「ブロック活動」が挙げられます。ブロック活動とは、「異学年集団で行う自治的活動」のことです。学校生活の多様な場面において、1年生から3年生までが協働して活動にあたるというプログラムが教育課程に組み込まれています。

大口中学校の教科センター方式は、「異学年交流型教科センター方式」と呼んでいます。この名前の通り、ブロック活動は、教科センター方式を行うために欠かすことのできない、いわば車の両輪ともいうべき活動です。具体的には、第2章Ⅲ「ブロック活動編」で述べていきますので、後述をご参照ください。ここでは、ブロック活動を学校経営の特色として掲げた理念について述べていきます。

大口中学校は、開校時に、一つの志を立てました。それは、「これまでの学校像を“模写”した学校ではなく、新しい学校を創ろう」というものです。そして、その新しい学校のコンセプトは、「自治・自浄能力を育む学校」です。そして、そのために、「全ての教職員で全ての生徒を育てる」という指導方針を立てました。ブロック活動は、この志を実現するための手立てとして行う活動である、と言えます。

### 3 大口中学校は、大口町の生涯学習活動の拠点です。

大口中学校が、「異学年交流型教科センター方式」を取り入れた目的は、「生涯にわたって学び続ける人の育成」です。教育はいわゆる“学校教育”だけで終わるものでなく、生涯にわたる学びがあってこそ、為し得るものであると言えます。本町においても、「大口町生涯学習基本構想」のもと、多様なライフステージにおける学びの場づくりが進められました。そして、大口中学校は、単に中学校を建てるという志向ではなく、大口町民の生涯学習の場として、その拠点となるべく、建設されました。

この理念の具体化のためには、「生涯学習のまちづくり実行委員会」が設立されました。以来10年にわたって、地域住民の参画のもとに、その具現化が図られてきました。その具現化の第一歩となった活動は、「地域ふれあい清掃」です。この活動は、地域住民が生徒と一緒に清掃活動を行う、というものです。この活動は、毎週金曜日に行われ、この10年間、途切れることなく続いています。このことは、“奇跡”と呼んでも過言ではないと思っています。

なぜ、10年間もの間、途切れることなく続いているのでしょうか。それは、活動に参加する地域住民にとって、自らの意思で参加し、生徒との清掃を通しての会話、参加者同士との会話の中で人間関係を形成し、やりがいを見出していったからに他ならないと思います。中には、この活動が「生きがい」とまで、おっしゃられる参加者もいます。

大口中学校には、地域開放室を拠点とした生涯学習棟が整備され、幼児から小学生、一般成人に至るまでの学習機会を提供する場となっています。大口中学校を大口町の生涯学習活動の拠点として多様な世代が集い、互いに交流する機会が生まれています。大口中学校は、この中学校の場に集う人との関係性の中に生徒を置き、「豊かな心とたくましい体を持ち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒を育成する」という大口中学校の教育目標を達成しようとしています。